

# 初期キリスト教における十字の印と十字の切り方

——その歴史と意義をめぐって——

Le symbole et le signe de la croix dans le christianisme ancien

——Remarques sur leur histoire et signification——

Ileana TRUFAS

## Abstract

Le but de cet article, centré sur les premiers siècles du christianisme (2<sup>e</sup> siècle – 7<sup>e</sup> siècle) est le suivant:

1. Présenter quelques expressions représentatives de la croix et de ses substituts et montrer que: d'une part, tout au moins jusqu'à la «Paix de l'Église» (313) et à l'encontre de l'opinion courante, la croix n'a pas été représentée comme l'instrument du supplice du Christ et que, d'autre part, à partir du milieu du 5<sup>e</sup> siècle quand apparaissent les premières représentations du Crucifiement et jusqu'au moins le 9<sup>e</sup> siècle, la plupart des ces représentations présentent en général un Christ glorieux, victorieux sur la mort, et non pas un Christ souffrant.

2. Présenter quelques documents sur l'usage du signe de la croix — surtout sur l'usage personnel — et, à travers ceux-ci, montrer qu'aux premiers siècles du Christianisme ce geste est un acte fondamental pour la vie chrétienne. Proclamation de l'identité chrétienne, synthèse de l'enseignement chrétien dans ce qu'il a d'essentiel, gage d'efficacité liturgique, compagnon de tous les jours du fidèle, le signe de la croix est en effet le sceau par excellence du Christianisme.

## はじめに

キリスト教における「十字」の印の歴史と意義を考える際には、以下の二つの側面を区別することが必要である。

(1) イコノグラフィにおける十字。つまり十字そのものの多種多様な表象や、その置き換え、諸々の「イメージ」などという意味での十字。

(2) 仕草としての十字。つまり他人や自分自身、あるいは物に対して、様々な目的のために切られるもの。典礼の際に切られる儀礼的な十字や、あるいは儀礼的ではなく、個人的に切られる十字。

こうした区別を踏まえた上で、本稿の主な目的を述べるならば、以下のようになる。

(1) 初期キリスト教（概ね 2 世紀～7 世紀にかけて）における十字の代表的な表象および、その置き換えを紹介し、同様の主題に関する研究成果に基いて、次のような見解を提示すること。すなわち一方では、現在の支配的な見解とは異なるが、少なくとも「教会の平和」（313 年）に至るまで、とりわけユダヤ・キリスト教世界において、十字はキリストの受難の道具とは解釈されていなかった。また一方では、キリストの磔刑像が登場しはじめた 5 世紀から少なくとも 9 世紀に至るまで、このような磔刑像の大半は、苦しんでいるキリストではなく、主として栄光のキリスト、死に勝利したキリストを表現していたのである。

(2) 初期キリスト教における十字を切ることの実践——とりわけ個人的実践——に関する若干の資料を紹介し、キリスト教最初期の数世紀間、この仕草が基本的なものであり、キリスト教的な生活と切り離せない、重要な役割を果たしていたことを示すこと。

初期キリスト教（概ね 2～7 世紀にかけて）に焦点を当てつつ、本稿では以下のような構成に沿って議論を展開する。

- (一) 十字の表象および、その置き換えと、それらの歴史的文脈
- (二) 十字やキリストのモノグラムの形式およびそれに関連する他のシンボル
- (三) 十字およびそれを額に切ることの解釈
- (四) 個人的に十字を切ることについて語る文献
- (五) 十字を切ること、キリスト教の刻印——まとめ

### （一）十字の表象および、その置き換えと、それらの歴史的文脈

キリスト教が生まれたのは、十字架が最も恥辱に満ちた苦痛の道具とされる世界だった。「木にかけられた死体は、神に呪われたものだ」（申 21：23）。そこでは、磔にされた神であるキリストを説くことなど思いもよらなかった。「わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまりかせるもの、異邦人には愚かなものです」（一コリ 1：23）<sup>1)</sup>。福音書においてすら、「十字架につける」という表現は、きわめて控え目に用いられている。マタイの福音書にはただ 1 箇所に見られるだけであり<sup>2)</sup>、またヨハネの福音書においては 3 度にわたって「上げる」という表現で包み隠して用いられている<sup>3)</sup>。最初の世代のキリスト教徒たちは概して、磔刑が行われている間、また 337 年頃に磔刑が廃止された後も、その記憶が色濃く残っている間は、十字架、とりわけ十字架にかけられたキリストを表象しないようにしたと考えられる。

いずれにせよ、十字やその置き換えの諸表象は、古くとも 2 世紀の半ばほどまでしか起源を遡れない。

これに対し、十字を切る仕草<sup>4)</sup>の歴史は非常に古い。その習慣は文字として残されていない使徒たちの伝統にまで遡ることができる。つまり、十字を切る習慣の起源は、キリスト教の起源そのものに求められることになる。375 年頃に、聖パシレイオスは洗礼の際に切られる十字について語って、次のように述べている。

教会が保持している諸々の教説と諸々の宣教のうち、一つは、書かれた教えから、私たちは持っている。そして一つは、使徒たちの伝承から、秘されたものとして手渡されて、受け継いでいる。〔こ

れら] 二つは、いずれも敬虔に対して、同じ力を持っている。……例えば、(最初に行なう最も一般的な習慣を思い出すなら)、私たちの主イエス・キリストの御名に望みをおく人たちを、十字の印で、印づけることは、誰が書き物で教えたか<sup>5)</sup>。

では、十字の表象の中で最古のものは、一体どのような形を取って現れたのだろうか？

弁神論者や教会の教父といった人々は、旧約聖書の中に新約聖書の前触れとなるものを熱心に探し、そこにキリスト教的な十字の「予型」を数多く見出したのである。すなわち、楽園の樹<sup>6)</sup> やヤコブの梯子、両腕を広げたモーセの祈りの姿勢、またモーセによって掲げられた青銅の蛇などがそれである。

また 150 年頃にユスティノスは、その形に基づいた十字のイメージとして、航行する帆船のマストや犁、2 本の斧などを挙げている。彼が指摘するところによれば、その最も完璧なイメージは、両腕を広げて直立した人間の姿(古代の人々が祈る時の姿勢)にこそ見出されるのだという<sup>7)</sup>。テルトゥリアヌス、(ローマの) ヒッポリュトス、ニュッサのグレゴリオスらにとっても、帆船の垂直に立ったマスト(帆柱)と、帆が上げられる水平のヤード(帆桁)とは、自然な十字のシンボルをなす<sup>8)</sup>。また、2 世紀の終わりには、アレクサンドリアのクレメンスが、印璽や鳩、魚、船、竖琴といったイメージを列挙している<sup>9)</sup>。

興味深いことに、最も古い十字の表象は概ね、上に述べたような文献の記述と一致している。実際のところ、3 世紀さらには 2 世紀にまで遡る。ローマのカタコンベ内部には、十字そのものに加え、次のような表象も見出される。すなわち平穏無事な帰港を思わせる十字形の碇や、帆の張られたマスト、青銅の蛇、2 本の鋭い斧、両腕を高く掲げた祈りの姿勢——それは救済されたキリスト教徒の魂を示している——などである。

しかし、313 年にコンスタンティヌス大帝がキリスト教を公認したこと——「教会の平和」——により、また 330 年頃の「聖なる十字架」発見——本物の、もしくは本物だとされている「真の十字架」ないし「聖なる木」の発見<sup>10)</sup>——の影響で、十字の表象には大きな変化が起こった。

建築においては、十字がバシリカの頂点に現れる。多くの洗礼堂で十字は中心的なテーマとなり、教会の後陣にある十字は金箔を貼られ、宝石で飾り立てられる。墓地でも十字の表象が多用される。このように「教会の平和」以降、十字の表象が——とりわけ、十字そのものと十字からなるキリストのモノグラムが——文字通り至る所を覆い尽くす。礼拜堂や棺、記念碑、硬貨、旗、小盾、王冠、王笏、日用品、宝石、護符など、ありとあらゆるものを。

こうした傾向をより強固なものにしたのは、「聖なる十字架」発見を契機として 4 世紀の半ば頃生じた、十字架崇拜であった。348 年にエルサレムのキュリロスが述べているところによれば、「聖なる十字架」の崇敬された木は「小さな木片となって、世界中に分散された」のだという<sup>11)</sup>。このような崇拜が、5 世紀および 6 世紀における、金銀細工品の飛躍的發展を決定付けた。十字架の聖遺物箱、祝福用の十字、十字の首飾りなどが、その主な実例である。

これに対し、磔刑像が登場するのは 5 世紀の半ば頃になってからであるが、5 世紀中のものとして知られているのは、わずか 2 例だけである(そのうちの一つは図 38)<sup>12)</sup>。6 世紀にはキリストの受難に先立つ一連の出来事についての表象が多数存在するが、その中にキリストの磔刑像を描いたものは見当たらない。6 世紀の終わりには、幾つかの威厳に満ちたキリストの磔刑像が見られるも

の、いずれも小品（ビザンティン様式の小瓶など）である。9世紀の初めに登場するビザンティン様式の磔刑像では、キリストが長い衣を身に纏い、眼を大きく見開いて、溢れんばかりの威厳と落ち着きを湛えている（図39）<sup>13)</sup>。しかしこのような厳かなキリストの磔刑像は、西方でもとりわけ11世紀から13世紀にかけてロマネスク様式においてたくさん見出される（図40, 41）。L. H. Grondijsによれば、両眼を閉じ胸の上に頭を垂れている、死せるキリスト、つまり今日よく知られているようなキリストの磔刑像は、9世紀以降に登場したものであり、それ以前には見つからないという<sup>14)</sup>。

このようにキリスト教美術は何百年もの間、威厳に満ち活き活きとした、死に際し自らの死に勝利したキリストを好んで描き続けたのである。しかし時代が下ると、肉体的な苦しみや荊の冠、死に至る激痛に苛まれるキリストへと、よりアクセントが移ってゆく。そして15世紀以降、とりわけ西方においては、古くからの威厳に満ちた表象に代わり痛ましいキリストの磔刑像が顕著なものとなっていくのである（図42, 43）。

## （二）十字やキリストのモノグラムの形式およびそれに関連する他のシンボル

古代において十字を表すために用いられた形式には主に6種類<sup>15)</sup>、そしてキリストのモノグラムには3種類<sup>16)</sup>が見出される。

### 十字形の種類

1.  $\mathbf{+}$  (*crux quadrata*) : ギリシア十字形。そのままか、円に内接した十字形。
2.  $\mathbf{X}$  (*crux decussata*) : ギリシア文字の  $\chi$  (*chi*) に類似した十字形。
3.  $\mathbf{+}$  (*crux immisa*) : ラテン十字形。そのままか、円に内接した十字形。
4.  $\mathbf{T}$  (*crux commissa*) : タウ十字形。ギリシア文字の  $\tau$  (*tau*) や、ラテン文字の T に類似した十字形。
5.  $\mathbf{\Gamma}$  (*crux gammata*) : スワステイカ。ギリシア文字の  $\Gamma$  (*gamma*) 4つが1つになったような十字形。
6.  $\mathbf{\text{ankh}}$  (*crux ansata*) : アンセイタ十字形。エジプト十字形 (*ankh*)。

### モノグラムの種類

1.  $\mathbf{I}$  (*iota*) と  $\mathbf{X}$  (*chi*) : ギリシア文字によるイエス・キリストという名前の頭文字 ( $\mathbf{IHCOYC XPICTOC}$ )。
2.  $\mathbf{X}$  (*chi*) と  $\mathbf{P}$  (*rho*) : ギリシア文字によるキリストという名前の最初の2文字 ( $\mathbf{XPICTOC}$ )。
3.  $\mathbf{T}$  (*tau*) と  $\mathbf{P}$  (*rho*)。

こうしたモノグラムは、そのまま、または円に内接した形で用いられている。

### 十と十の十字形

ローマのカタコンベでは、コンスタンティヌス大帝以前の時代に遡るこのような十字形が、30ほど発見されている。それらはすべて、3世紀初めのものである（たとえば図3）<sup>17)</sup>。こうした十字形に3世紀より古いものは存在していなかったと主張する学者もある<sup>18)</sup>が、中東では、163年と197年に刻まれた碑文にこのような十字形が見られる<sup>19)</sup>。さらに加えて、コンスタンティヌス大帝



以前に刻まれた二つの石碑にも十字形が見出される。一つの石碑には円に内接したラテン十字形が見られ、今ひとつの石碑にはギリシア十字形が見られる<sup>20)</sup>。

### 卐の十字形

スワスティカ（時計回りのものも、反時計回りのものも）は、大量の碑文に並んで、3世紀のカタコンベ（とりわけ Priscilla）に多く見出される。それは単独で、もしくは円に内接したギリシア十字形やモノグラム米といった、他のキリスト教的シンボルと共に描かれている。学問の世界では、キリスト教内におけるスワスティカの存在に関して、一致した見解が存在しない<sup>21)</sup>。

### ⲓの十字形

幾つかの型を有しているこの十字形が、エジプトにおいてのみ見出されることは驚くに当たらない（図 21）。この地方のキリスト教徒たちは、「命」を意味するアंकという古代エジプトのシンボルを「来たるべき命」という意味に解釈することで、またその形の上で、早くも初期キリスト教からそれを熱心に採り入れたのであった<sup>22)</sup>。

（TとXの十字形に関しては、敢えてここで説明を行わず、後述する）

### モノグラム

モノグラムの米や卐は、アテネやシリア、アルメニアの硬貨に、またモノグラムの米は、キオス島の硬貨に、すでに4世紀以前に描かれている<sup>23)</sup>。つまり、それらは「教会の平和」に先立って存在していたのである。ローマのカタコンベにも見出される（図 1）。コンスタンティヌス大帝やその後継者たちの治世下で、そうしたモノグラムは極度に増加し、とりわけ a が優れて *Signum Christi* となった（図 6-9, 11-15, 17-19, 22-27, 29-30）。

十字やモノグラムと一緒に描かれる、幾つかのシンボル

### アルファ（A）とオメガ（ω）

その使用は、『ヨハネの黙示録』に由来している。たとえば「神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである」」（黙 1：8）、「わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり終わりである」（黙 22：13）など。キリスト教の最初の数世紀において、アルファは常に大文字で、またオメガは小文字で描かれた。Aとωのシンボルはしばしば、十字やモノグラムを伴っていたが（図 8, 12, 14, 22, 23, 32, 33）、時には単独で描かれることもあった。

### 碇

コンスタンティヌス大帝以前のカタコンベ内にある碑文には、碇のシンボルが頻出する（Priscillaだけでも約 100, Callixtus に 35）（図 1, 2）。それらの大半は、3世紀の前半に描かれたものである。古代以来の意味である希望に加えて、キリスト教徒たちにとって碇は、救いの港に、平穏な母港に辿り着くことへの期待を意味していた。カタコンベの最古の墓碑銘（2世紀末、Priscilla 内）には碇と並んで、「Pax tibi」（汝が平和とともにあらんことを）」などという言葉が見られる<sup>24)</sup>。しかし、このような碇は、それが実際に用いられる器具としての形ではなく、ラテン十字形ないしタウ十字

形へと近付けるように描かれているのである。またしばしば、碇にかけられた、キリストを象徴する魚も描かれている（図4）。こうした二つの事実は、碇のシンボルに込められたキリスト教的な意図を、明確に示している<sup>25)</sup>。

### 魚や魚たち

魚がキリストのシンボルなのは、魚を意味する *ichthus* という言葉（普通名詞）が、ギリシア語で「神の子にして救い主のイエス・キリスト」（*Iesous CHristos THeou Uios Soter*）のアナグラムだからである。ある意味で、この一文にはキリスト教の全教義が要約されている（図1, 5）。しかし、キリスト教徒が一体いつ、いかにしてこのような発見に至ったのかを知ることは、きわめて困難だろう。魚＝キリストは、とりわけイルカの形で表象された（図4）。ギリシア人やローマ人にとって、イルカは海で遭難した際に人を助けてくれる動物として人気があった。それゆえ、キリスト教徒はこうしたシンボルを、進んでキリストに当て嵌めたのである。

だが、初期キリスト教のシンボリズムにおいて、とりわけ洗礼の文脈で、魚は信仰者たちをも表している。たとえば、200年頃にテルトゥリアヌスは、「されど我ら小さき魚は、水の中にて生まれたり」と書いている<sup>26)</sup>。したがって、古代のイメージには2匹かそれ以上の魚が描かれていることがある。それらの魚が表しているのは、キリストではなく信仰者なのである（図2-4）。

### 生命の樹

『ヨハネの黙示録』に基づき——「勝利を得る者には、神の楽園にある命の木の實を食べさせよう」（黙2:7）——、古代キリスト教の著作家たちは、きわめて頻繁にキリストと生命の樹の同一化を行っている<sup>27)</sup>。もしもキリストが生命の樹であるならば、救済された者はその朽ちることなき果実である。また一方で、キリストのシンボルは十字であり、そこにおいては十字と生命の樹との同一化が、完璧に自然なものとなっている（図16）。

### 葡萄の木や、葡萄の房

葡萄の木や葡萄の房のシンボルは、初期キリスト教の石碑の中でしばしば十字と結びつけられているが、それは、聖書の記述に由来している。「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」（ヨハ15:1）、「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながってなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながってなければ、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである」（ヨハ15:4-5）。キリストは葡萄の木であり、新受洗者は葡萄の枝であり、そして救済された者は葡萄の実なのだという（図10, 28, 30, 32）。

### 鳩

古代のイコノグラフィーには、口にオリーブの枝を咥えた<sup>28)</sup>、もしくは何も咥えていない鳩が、しばしば十字と並んで描かれている。この場合、鳩が意味しているのは聖霊ではなく、信仰者の魂である。実際のところ、それは時として「Pax」という銘文を伴っており、信仰者に約束された永遠の平和と密接に結びついている。コンスタンティヌス大帝以降、鳩はしばしばモノグラム a と一

緒に表象されている（図 22, 23, 26）。

### 孔雀

古代の伝統によれば<sup>29)</sup>、孔雀は冬の始まりに美しい羽の衣を失くし、春にそれを見つけ出すのだという<sup>30)</sup>。孔雀を不死や復活の象徴にするためには、ただそれだけで十分だったろう。聖杯と結びつけられた孔雀は数多くの場所に見られる（図 30）が、その中でも最も古い例は、3 世紀の Priscilla カタコンベにある<sup>31)</sup>。

### 小羊

キリストを神の小羊として描いた最も古い例の一つは、3 世紀初めのもので、Callixtus カタコンベの中にある。それは、旧約聖書における贖罪のための犠牲に擬えたものである<sup>32)</sup>。「ヨハネの黙示録」に描かれている、山の上に立った小羊の表象<sup>33)</sup>が登場したのは、およそ 4 世紀の初頭頃からのことだとされている<sup>34)</sup>。このような表象において、山の上から流れている 4 つの小川は楽園の 4 つの川を、もしくは 4 人の福音史家を示唆しており、小羊の頭部に光輪が描かれることもある。5 世紀以降には、十字架やモノグラムを帯びた小羊が登場することになる（図 35-37）。

### 冠

冠は「教会の平和」以前のキリスト教石碑にすでに登場していた。それは時として、ギリシア的な用法に従い、勝利者に褒賞として与えられた冠であると解釈された。しかし、すでに旧約聖書において、冠は永遠の至福を意味していた<sup>35)</sup>。新約聖書において、冠は選ばれし者の栄光や、彼らに与えられた不変なる命のシンボルである。そこには「朽ちない冠」、「しほむことのない栄冠」、「命の冠」と呼ばれている<sup>36)</sup>。冠とは文字通り、「正しき者」ないし「選ばれし者」の「戴冠」である。古代の石碑に、冠が十字と一緒に描かれたのは、こうした意味合いにおいてであった。冠は、十字の救い的手段としての意義を強めたのである（図 11, 12）。

## （三）十字およびそれを額に切ることの解釈

初期キリスト教における十字を解釈する上での鍵は、とりわけ *tau* (T) の十字形にあると思われる。*tau* の十字形、またそれと関連が深い X の十字形についての指摘を後回しにしたのも、こうした理由からであった。たとえば J・ダニエルーは、次のように述べている。

十字の印が現代に生きる私たちに普通思い起こさせるのは、キリストが磔にされた処刑台である。しかし、私たちはそれが、果たして最初のキリスト教共同体において額に切られていた十字の起源なのだろうかと思ってみなければならぬ。そして、どうやらそうではないらしい。十字を切る仕草は、その起源においては別の意味を帯びていたようなのである<sup>37)</sup>。

2 世紀の『バルナバの手紙』（9：8）やニュッサのグレゴリオス（4 世紀）といった様々な古い文献に基づき<sup>38)</sup>、ダニエルーはこうした十字、とりわけ切られた十字の印の「別の意味」を *tav* というヘブライ文字に結びつけているのだが、これには次のような理由がある。十字の印を切る根拠と

しては、主として聖書の二つの書、すなわち『エゼキエル書』と『黙示録』が、早い時代から認められてきた。特に旧約聖書の『エゼキエル書』は、ユダヤ・キリスト教世界にとっても同様、初期キリスト教教会の教父たちにとっても特別な意義を有していた。同書の記述によると、メシアの共同体に属する者たち——つまり、それが自分たちのことだと信じていた初期のキリスト教徒——は、「額に印 (*tav*) を付けられる」のだという<sup>39)</sup>。さらに聖ヨハネは「神の僕たちは額に刻印が押されるようになるだろう」と述べ<sup>40)</sup>、また大勢の人々の「額に小羊の名と、小羊の父の名とが記されていた」のを見た<sup>41)</sup>と語っている。

ところで、聖ヨハネが語っている「父の名」とは、まさしく『エゼキエル書』において述べられていた印、つまり *tav* の文字に他ならない。「父の名」が *tav* によって示されている理由の一つは、ヘブライ文字の *tav* がアルファベットの最後の文字だからである。それはギリシア文字の *omega* と同じように、神（ヤハウェ）を示している。

上に掲げた「額に小羊の名と、小羊の父の名とが記されていた」という『黙示録』の文言からも明らかなように、二つの名、つまり父（神）と小羊（キリスト）という両者の名を示すのは、同じ一つの印である。このように、聖ヨハネにとっても同様初期キリスト教徒たちにとっても、神（ヤハウェ）の名は同時に「子」（キリスト）の名でもあった。実際、最古のキリスト教文献には、この点について言及したものがかなり多い。たとえば、「聖なる父よ、あなたが、あなたの聖なる御名を私たちの心に住まわせるため、私たちはあなたに感謝いたします」（1世紀末頃）<sup>42)</sup>。ここでいう「あなたの聖なる御名」とは、明らかにキリストを示唆している。さらに、神の名とキリストの名、もしくはキリスト自身との同一性についてより明らかに述べた、次の文書もある。「父の御名とは子である」（2世紀半ば頃）<sup>43)</sup>。

このように、最初期のキリスト教内で頻繁に用いられた「名を帯びる」という表現は、エゼキエルの預言および聖ヨハネの啓示に基づき、最初のキリスト教徒たちがキリストの御名を表す *tav* という印を額に印されていた事実を示していると言えるだろう。同時に、この表現は洗礼を受けることを意味してもいる<sup>44)</sup>。というのも「名を帯びる」ことは、キリスト教徒、聖ヨハネに従えば「神の僕」となることを意味しているからである。

ところで、ギリシア語およびラテン語を用いた初期キリスト教の著者たちは、ヘブライ文字の *tav* に代わって、形の上でそれとよく似たギリシア文字の *tau* (Τ) あるいはラテン文字の T について語っている。

たとえば、オリゲネス（185 頃-254 頃）は以下のように述べている。

文字 *tau* は、十字形と類似性を有していて、それを示している (*littera tau exhibere, ut figuram crucis referat*) ……そしてエゼキエルの預言は、キリスト教徒が額に印をすることと関連していると言われている<sup>45)</sup>。

そして、テルトゥリアヌス（160 頃-220 以降）が明確に述べている通り、エゼキエルがメシアに従う人々の額に印されるだろうと預言した *tav*こそ、キリスト教の十字なのである。

ギリシア文字の *Tau* [つまり] われわれの [ラテン文字] T は、[予言者エゼキエルによれば] われわれの額に印されるだろう十字の形なのである (*Ipsa est enim littera graecorum Tau nostra autem T species Crucis quam portendebat futuram in frontibus nostris*)<sup>46)</sup>。

キリスト教徒の中でも十字の印を「主の印」と呼んだ最初期の一人として、(アレクサンドリアの)クレメンス (150-215 頃) が挙げられる。ただし、彼のいわゆる「十字」とは、ギリシア文字の *tau* (Τ) だった<sup>47)</sup>。とはいえ、先述の通り彼にとってもまた、それはエゼキエルが語る *tav* と同等のものに他ならない。

このように、キリスト教における最古の文献の多くが、十字をキリストの印と見なしていた。ただ、そうした文献の著者らは十字を受難の十字架としてではなく、神としてのキリストの御名を示す、エゼキエルの印として理解していたのである。

それゆえ、初期キリスト教においてキリストの印、つまり十字のことが語られる際、それを表すためにギリシア文字の *tau* あるいはラテン文字の T が用いられていても、エゼキエルの預言と切り離されない限り、その印がもつ基本的意味に変わりはない。つまり、この印が神の御名を示す点は揺るがなかったのである。

ところで、この *tav* すなわち額に印された十字とは、厳密に果たしてどんな形をしていたのだろうか？ アルファベットの文字として、また形の類似性の上でのヘブライ文字の *tav* と同一視された、ギリシア文字の *tau* Τ や、ラテン文字の T であったはずはない。というのも、両者の形は十字形、つまり十あるいはそれに近い形とまったく似ていないからである。一方、著者たちは、T あるいは T がキリスト教の印であることを明確に述べている。では、一体どのような形だったのか？

この難問に対する回答として考えられるのは、次のようなものである。すなわち、紀元 1 世紀近辺においてヘブライ文字の *tav* は、十ないし X と表記されていた<sup>48)</sup>。それゆえ額に *tav* の印を切るということは結局、十ないし X という真の意味で十字形をした印を切ることを意味していたのである。事実、紀元 1 世紀のパレスティナの納骨堂では、*tav* がまさに十ないし X の形で記されている<sup>49)</sup>。これらこそ、キリスト教における十字の最古の表現形式だったと言ってよい。

また、日付を有しており、X の形で書かれた十字の最も古い表象が、「永遠にその御名が祝福される方へ」と記された、シリアの銘文の中に見出される。この銘文は、十字が「神の御名」のシンボルと見なされていたことを、明白に示している。また、同銘文の終わりには X [日付] X という形で、日付が 2 つの X に挟まれ表記されているのだが、この日付は 134 年の 4 月に当たる。H・ルクレルによれば、「これら [2 つの X] は確かに十字のシンボルである」という<sup>50)</sup>。

他方で、ローマのカタコンベではとりわけ「教会の平和」(313 年) 以前の時代に、X の十字形よりもむしろ T と十および十の十字形が多く見出される。さらに加えて、十字形を連想させるのが曖昧ではっきりとしない形のものも、数多く発見された<sup>51)</sup>。

ここまで十字形に関し述べてきたことをまとめて、次のように言うことができる。すなわち、初期キリスト教における十字形の様々な使用に関しては、下記のような 3 つの区別を行う必要があるのではないだろうか。

第一に、文献が「印」や「主の印」および「十字 (の印)」について語る場合、それらはギリシア文字 *tau* (Τ) か、もしくはラテン文字 T と同一視して語られている。

第二に、十字の印が何らかの表面 (壁、記念碑など) の上に具体的に描かれる場合、T, 十, 十ないし X という十字形が用いられる。

そして第三に、十字が額に切られる際は、ただ十あるいは X という十字形だけが用いられる。

いずれにせよ、オリゲネスやテルトゥリアヌスなどの言葉からも明らかのように、キリスト教の最初の数百年にわたり信徒たちは、十あるいは X の印を額に切っていたのである。そして、十字形の一つでもあるこれら印により想起されていたのは、受難の十字架よりもむしろ、エゼキエルの預



言におけるヘブライ文字の *tav* を介した主の御名、キリストの名だったのである。

ところが、キリスト教教団が当時のローマ帝国内に広まり、その大分部がギリシア語およびラテン語を用いるようになったことで、そして特に「教会の平和」つまり 313 年にコンスタンティヌス大帝がキリスト教を公認したことで、当然の結果としてヘブライ文字の *tav* は異なった解釈をされるようになった。一部の例外を除いて、それはもはや「主の御名」でなく、主の受難が行われた道具と解釈されるようになったのである。しかし、だからといって十字がもつそもそもの意味を無視する理由にはならない。このような判断から、N・モリエウや J・ダニエルーといった学者が、次のように述べている。

しかし、そもそも十字の印はキリストの受難の示唆として現われたものではなく、それはむしろ神のロゴスにおいて現れる神の光栄を示すものとして現われたのである<sup>52)</sup>。

最初のキリスト教徒たちが十か、あるいは X という十字の形で額に印されていたことは、確かなことだと見なすことができる。彼らにとってこの印は主の御名、すなわち御言葉を示していた。そしてこの十字を額に切られることは、彼らが神にささげられていたということを意味していたのである<sup>53)</sup>。

初期キリスト教が栄え、本来のユダヤ・キリスト教世界の枠を越えて他の世界へ広まって行くに連れ、上述のような十字の意味は次第に理解されなくなっていった。そのため幾つかの例外を除き、十字の意味は次のように解されるようになったのである。すなわち、十字形十がイエスの磔に使われた道具として、また十字形 X が、ギリシア語でのキリストの名前の頭文字 X (PICTOC) として、などといったように。

以下に、この主題に関するダニエルーの結論を引用したい。

十字の印の起源とは、キリストの受難を暗示するものではない。そうではなく、キリストの神的な栄光を指し示すものなのである。たとえ十字が、磔にされたキリストの十字架そのものを指し示している場合でも、十字架は、死によって働きかける神力的力の表現だと見なされる。そして十字架の四方に伸びる線は、こうした救済をもたらす神적働きかけに備わった、宇宙論的な性質のシンボルだと見なされるのである<sup>54)</sup>。

すでに見た通り、初期キリスト教には最初の数世紀間、磔刑像が存在していなかった。その確かな一因として、磔刑という恐るべき刑罰の記憶が、人々の心に恐怖を呼び起こさせていたことが挙げられる。

しかし、ダニエルーが説得的に提示した、初期キリスト教における十字の解釈もまた、一つの妥当な理由になり得る。つまり、十字架とは磔の道具よりもむしろ、キリストの御名と神적栄光のシンボルだという解釈である。責め苦の十字架は、復活へと導く十字架に較べれば、二次的なものにすぎない。このことを見事に証しているのは、4 世紀ならびに 5 世紀の石棺だろう (図 11, 13)。これら石棺を飾っている剥き出しの十字架には、キリストの身体を表すものなど何もない。その上に見られるのはただ、キリストのモノグラムを取り囲んだ冠だけなのである。

#### (四) 個人的に十字を切ることについて語る文献

十字を切ることは、初期キリスト教に見出される最も確かな実践の一つである。キリスト教徒は皆、あらゆる場合に一本の指（親指か人差指）を用いて、とりわけ額に十字を切る。

テルトゥリアヌス（160 頃-220 以降）は 211 年頃に、十字を切る行為について、長大なリストを提示している。

何かをしようとする際に、（あらゆる動作の）始まりと終わりに、着替える時や靴を履く時、入浴の時、食卓に着く時、明かりを灯す時、寢床に就く時、座る時、その一挙手一投足に際して、私たちは額に十字を切る（Ad omnem progressum... frontem crucis signaculo terimus）<sup>55)</sup>。

テルトゥリアヌスにとって、こうした習慣は長い歴史を持つ当たり前のもので、彼が書いた時代より遙か昔から続いている伝統だった。彼の言葉は、本来典礼を起源とした十字を切る仕草が、信徒の個人的な日常生活内でも、2 世紀の初め頃すでに驚くほど多用されていたことを示している。十字を切る習慣が正当なものだと根拠付けるために、テルトゥリアヌスは文献ではなく、口承の伝統の力を借りる。というのも、彼によれば十字を切る実践について、聖なる書は何一つ触れていないからである<sup>56)</sup>。

3 世紀の初め頃に関しては、もう一つの貴重な文献、215 年頃書かれた、（ローマの）ヒッポリュトス（170 頃-235 頃）の『使徒伝承』が挙げられる。

真心こめて自分の額に十字を切ることをつねに求めなさい。なぜなら、それは受難の印であり、信仰をもってなされるならば、悪霊に反して〔よく〕知られ、確実な〔力をもつ〕印である……。というのは、敵〔つまり悪霊〕が、ここから湧き出るこの印の力によって、……追い払われるからである<sup>57)</sup>。

上の文章において、十字を切る仕草は、受難の十字架と見なされている。とはいえ 3 世紀の初め頃は、もはや最初期のユダヤ・キリスト教における環境から遠く隔たっているので、無理もないことだろう。

キュプリアヌス (?-258) は、ある手紙の中で、殉教者を次のように励ましている。

神の印が完全に保たれるよう、汝が額を強めよう<sup>58)</sup>。

上の引用は、十字を切るのではなく、むしろ永続的に額へと刻まれた十字の印について語っている。しかし、この点については改めて後述する。

また 251 年、迫害に屈しなかったキリスト教徒たちに対してキュプリアヌスは次のように述べている。

十字の印によって浄められた額は、神の冠を戴くだろう（frons cum signo Dei pura... coronae se Domini reservavit）<sup>59)</sup>。

洗礼に関するカテケシスにおいて、(エルサレムの) キュリロス (313 ? -387) は次のように書いている。

十字架にかけられたキリストのことを、憚らず述べ知らせよう。どんな時でも、私たちの印である十字を、指先で額の上に思い切りよく切ろう。私たちが食べるパンの上に。飲み物が入った杯の上に。出来の際に。就寝前に。寝起きする際に。去る時や留まる時に。それは力強い護り手である……なぜなら、それは神からの恩寵であり、信心深さの印であり、悪魔たちを恐れさせるからである……<sup>60)</sup>。

アウグスティヌス (354-430) の著作には、キリスト教徒が額の上に十字を切ることについての言及は多い。たとえば、

洗礼志願者に「キリストを信じるか？」と訪ねれば、彼が答える、「信じる」。そして今では彼が額の上にキリストの十字架を担っているので〔洗礼志願者になったので〕、自分の額の上に十字を切る。彼は主の十字架を〔もう〕恥ずかしく思わない (si dixerimus catechumeno: credis in Christum? respondet: credo, et signat se, jam crucem Christi portat in fronte et non erubescit de cruce Domini sui)<sup>61)</sup>。

上の引用からも分かるように、アウグスティヌスにとって額の上に切られる十字をキリストの磔柱と解釈するのは、もはや当然のことである。そして彼の権威を考えるなら、西方においてこうした解釈が主流となったのも不思議ではない。とはいえすでに見た通り、先行する(ローマの) ヒッポリュトスや(エルサレムの) キュリロスも、これと同様の解釈を行っていた。

一方で、アウグスティヌスは額の上に十字の印を切ることについての特殊な、初期キリスト教のあまり知られていない習慣についても語っている。実際のところ、この印をめぐる数多くの言及の中のあるもの、例えば *signum Christi portare, crucem Domini portat in fronte* (キリストの印を担う、主の十字を額に担う)<sup>62)</sup> などは、写実的解釈を要すると考えられる。言い換えるなら、こうした表現が示していると思われるのは、実際に描かれた、もしくは入れ墨された印であり、つまり永続的なものである。このような習慣に関する示唆は、先述のキュプリアヌスにおいても見られた。

またアウグスティヌスによれば、異教徒たちはキリスト教徒の衣服、髪形、そしてとりわけ額を見ただけで、キリスト教徒だと直ちに见分けていた<sup>63)</sup>。キリスト教徒が彼らの額で識別されたのだとすれば、それは彼らの額に永続的な十字が刻印されていたためだと理解することができるだろう。

このように、古代において奴隷、兵士、羊などが、ある永続的な刻印を押されていたのと同様、キリスト教徒は額に十字を刻印されていた。このような実践(習慣)の意図について、ロンデは次のように述べている。

〔この習慣があったからと言って〕5世紀のキリスト教徒たちが皆十字形の入れ墨を〔額に〕もっていたと考えてはならない。しかし、北アフリカのあるキリスト教徒たちが、平気でこの実践を行ったということが充分に考えられる。というのも、この実践によって彼らがキリストの奴隷、その群れの羊、その軍隊の兵士たちであることを皆に見せていたからである<sup>64)</sup>。

キリスト教史における数世紀の間、キリスト教徒は十字の印を、一本の指（指親か人差指）を用い、額に切っていた。これまでに紹介してきた文献——主として2世紀から5世紀にかけてのもの——が、またそれ以降も（9世紀にさえ）見出される無数の文献が、このことを明示している<sup>65)</sup>。

5世紀以降の例としては、たとえば8世紀に（ダマスコスの）ヨアンネス（650頃-750頃）が、次のように書いている。

イスラエルの民に割礼が与えられたと同様に、我々には額に〔切るための〕印として十字が与えられた。それによってキリスト教徒である我々が識別され、無信仰の人々から自分たちを区別する<sup>66)</sup>。

数多くの教父たちが<sup>67)</sup>、キリスト教徒は皆十字の印を切ることを実践し、またその効力を信じていると証言している。（キュロスの）テオドレトス（393頃-458頃）は、皇帝ユリアヌス（331/2-363）でさえ、信仰を捨てたにも関わらず、危険な時に思わずに十字を切っていたと語っている<sup>68)</sup>。

十字の印を切る仕草には、魔法とも言える、甚だしい効果が結びついている。

ブルデンティウス（348-410頃）が伝えるところによると、キリスト教徒である兵士たちは、戦に赴く前に十字を切っていた（*cruce fronti inscripta*）という<sup>69)</sup>。野生の獣と遭遇した場合は、相手へ向け空中に一本の指で十字を切ることににより、身を守ることができる<sup>70)</sup>。「父と子と聖霊の名において」と唱えながら、毒の盛られた杯の上に十字を切った、ある主教の例も挙げられている<sup>71)</sup>。

以上の様々な行為の意図を、フォーゲルは次のように要約している。

十字を切ることは確固たる信念から生まれた実践である。つまり、十字それ自体は祝福や恵み、護りや癒しの力に満たされているのだという強い信念が、そうした実践の源となっている。だからこそ、それは悪魔や邪な心、大自然の猛威といったものから人間を庇護し、さらにまた、病気や毒などに対する護符をも与えてくれるのである<sup>72)</sup>。

このように、十字の印を切る仕草は、キリスト教徒の個人的かつ日常的な生活において、一般的な保護の機能を果たしている。悪霊や獣、病気、毒、自然界のありとあらゆる危険（嵐、雷、稲妻など）に対する守りの役目を。とはいえ、それが何にも増して担っているのは、ありとあらゆる行為を成聖し、祝別する役割である。

そうであるからこそ、キリスト教徒は、「あらゆる仕事の始め」（オリゲネス）<sup>73)</sup>、「日常生活におけるすべての行為の際」（テルトゥリアヌス）、「すべての場合」（エルサレムのキュリロス）に十字を切ると、教父たちは言う。これらは、決して誇張ではないだろう。

## （五）十字を切ること、キリスト教の刻印——まとめ

十字を切ること——成聖、祝別あるいは厄除けのため、自分自身や他人に、あるいは何らかの対象物に対して行われるその仕草は、使徒たちの時代に始まったと考えられている。だが実際には、それが証明されているのは、紀元150年から200年以降である。その始まりからすでに、教会および初期キリスト教教団の信徒たちは、この仕草に極めて重大な効果を認めていた。だからこそ、時

代と場所により十字の切り方や解釈がかなり異なっていたにもかかわらず、彼らは信仰と畏敬の念を込めて、ありとあらゆる場合にこの仕草を実践した。

十字の印を切る仕草には、初期キリスト教の時代から豊富な諸側面がある。それらをイメージし易いよう、以下に同様の仕草がもつ主な目的や、それを実践する際の観点などについて、大まかな要約を提示したい<sup>74)</sup>。

### 目的

- 成聖・聖別・祝別する（聖体のパンと葡萄酒、洗礼の水などを成聖する。教会堂、鐘、イコンなどを聖別する。人などを祝別する）
- 讃美する・あがめる（三位一体（典礼ではその名が唱えられる時）、聖書、イコンなど）
- 入信を確認・承認する（洗礼志願者、洗礼者、堅信者、司祭、司教など）
- 尊敬をもって挨拶する（教会へ入る、そこから出る、その前を通る時など）
- 信仰告白をする、キリスト教徒であることを示す
- 自分の過ちなどを認める（告白する前など）
- 聖なる助けや祝福を求めて祈願する（様々な祈りや、日常生活における様々な行為の前など）
- 感謝する（日常生活における様々な行為の後など）
- 浄化する、悪払いをする（人、動物、建物など）
- 治す、癒す（病気など）
- 悪霊の攻撃に対する保護や、悪霊追放を行う

### 十字を切る主体

- 秘蹟執行者（主教、司祭など）が、（他の秘蹟執行者を含む）信徒の上に（遠くから、あるいは接触によって）十字の印を切る
- 秘蹟執行者が、ありとあらゆる物の上に十字の印を切る（あるいはそれを具体的に付ける）
- （秘蹟執行者を含む）信徒が、自分自身の上に十字の印を切る

### 十字の印に関する諸観点

- 規模（小十字形と大十字形）
- 縦の方向（つねに上から下の方へ）
- 横の方向（右から左へ、あるいは左から右へ）
- 十字が切られる体の部分（額、口、胸、腕、など）
- 指の数とその形（位置）
- 十字を切りつつ行われる、他の仕草（上体を軽く、あるいは深くかがめることなど）
- 十字を切りつつ（声に出すか、あるいは内的に）唱えられる、言葉
- 秘蹟執行者が、十字の印を切る際に用いる手段（手、祝別用の手持ち式の十字架、聖杯、イコン、聖遺物箱など）

十字の印とは、キリスト教徒としてのアイデンティティの証であり、キリスト教における本質的な教えの総括であり、諸秘蹟における儀礼の効果を保証するもの、日常生活における信者の友である。キリスト教の刻印そのものとさえ言えるだろう。だがそれは、十字が単に十字架上のキリスト



の受難を思い起こさせるからではない。真の理由は、むしろ次のようなことである。つまり、十字の印を切ることは、キリスト教的生の中で極めて重要な、欠かすことのできない役割を果たすのであり、それゆえキリスト教における生と十字の印を切ることは、切り離しえないものだからなのである。

## 註

- 1) 福音書においては数箇所です十字について述べられている。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(マタ 16:24)。また、マタイ 10:38、マルコ 8:34、ルカ 9:23、ルカ 14:27 などである。しかし、これらはキリストが磔にされた十字架を意味しない。そうした十字については、『使徒言行録』の中で、とりわけパウロが数回にわたり明確な言及を行っている。たとえば、「あなたがたが十字架につけて殺したイエス」(使 2:36; 4:10)「あなたがたが木につけて殺したイエス」(使 5:30; 10:39) など。ペトロの手紙一 (2:24) 参照。(本稿における聖書の引用は、『聖書新共同訳—旧約聖書統編つき—』, 日本聖書協会, 三省堂 1987 年に従う。)
- 2) 「……彼らは死刑を宣告して、異邦人に引き渡す。人の子を侮辱し、鞭打ち、十字架につけるためである」(マタ 20:18-19)。
- 3) 「そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである」(ヨハ 3:14-15)。同様にヨハ 8:28, 12:32)。
- 4) 十字を切ることは、何よりも儀礼において行われた。洗礼志願者の受け入れの際、洗礼、堅信、とりわけ聖体拝受の際に行われた。儀礼ではなく個人的に、ものや動物に対し十字を切る例として、家、畑、家畜などが挙げられる。
- 5) 聖大バシレイオス『聖霊論』(第 27 章 66)、山村敬訳、『キリスト教歴史双書 16』南窓社 1996 年、163 頁。一方、聖バシレイオス (330 頃-379) よりもはるかに先立ち、テルトゥリアヌス (160 頃-224 頃) もまた、十字を切る動作は聖書の中で証明されているわけではないと述べている。Cyrille Vogel, "La signation dans l'Église des premiers siècles", *La Maison-Dieu* 75, Cerf, 1963, p. 38, note 3 参照。
- 6) 世界 (生命) の木と、十字架、キリストの同一化は、とりわけヒュッポリュトス (ローマの) (170-235 頃) において明確に述べられている。Jean Hani, "Le signe de la croix", *Le Symbolisme dans le culte des Grandes Religions*, Ed. Julien Ries, Centre d'Histoire des Religions Louvain-La-Neuve 1985, pp. 316-329 参照。
- 7) St. Justin, *Apologie* I (151-154) 55: 3-6, dans Noël Maurice-Denis Boulet, "Les représentations de la croix dans l'Antiquité chrétienne", *La Maison-Dieu* 75, Cerf, 1963, p. 54.
- 8) Jean Daniélou, "Le Symbolisme cosmique de la Croix", *La Maison-Dieu* 75, Cerf, 1963, p. 35 参考。
- 9) Clément d'Alexandrie, *Pedagogus* III, II, 59: 1, dans Jean Daniélou, *Les symboles chrétiens primitifs*, Seuil, 1961, p. 74.
- 10) 早くも 4 世紀の末頃に、聖アンブロシウスとヨアンネス・クリュソストモスは、聖十字架の発見をコンスタンティヌス大帝の母であるヘレナ皇后が 328 年頃に行った、エルサレムへの巡礼と関連付けていた。Pierre Jounel, "Le culte de la Croix dans la liturgie romaine", *La Maison-Dieu* 75, Cerf, 1963, p. 68 参考。
- 11) P. Jounel, op. cit., p. 14.
- 12) N. Maurice-Denis Boulet, op. cit., p. 64. ローマのサンタ・サビーナ聖堂の扉にある、木製の小さな浅浮彫と、大英博物館にある象牙細工のことである。
- 13) N. Maurice-Denis Boulet, op. cit., p. 65.
- 14) Ibid., p. 66.
- 15) Henri Leclercq, "Croix et Crucifix", *Dictionnaire d'Archéologie chrétienne et de Liturgie (DACL)*, publié par Fernand Cabrol et Henri Leclercq, Tome III, 2e partie, Paris 1914, col. 3061-3062.
- 16) Paul Corby Finney, "Cross", *Encyclopedia of Early Christianity*, Second Ed., Ed. Everett Ferguson, New York and London, 1997, p. 304 参照。

- 17) Frédéric Tristan, *Les premières images chrétiennes*, Fayard, 1996, p. 72.
- 18) N. Maurice-Denis Boulet, op. cit., p. 55.
- 19) H. Leclercq, "Croix et Crucifix", col. 3059-3060.
- 20) N. Maurice-Denis Boulet, op. cit., p. 57.
- 21) H. Leclercq, "Croix et Crucifix", col. 3119-3120.
- 22) Ibid., col. 3122-3123.
- 23) N. Maurice-Denis Boulet, op. cit., p. 60.
- 24) F. Tristan, op. cit., p. 89.
- 25) N. Maurice-Denis Boulet, op. cit., p. 57.
- 26) Tertullien, *De Baptismo* 1: 3, dans J. Daniélou, *Les symboles chrétiens primitifs*, p. 56.
- 27) 例えば、ユスティノス、テルトゥリアヌス、アレクサンドリアのクレメンス、オリゲネスなど。J. Daniélou, *ibid.*, p. 40 参考。
- 28) 「鳩は夕方になってノアのもとに帰って来た。見よ、鳩はくちばしにオリーブの葉をくわえていた」(創 8 : 11)。
- 29) Plin, *Histoire naturelle*, I, 10: 22, dans F. Tristan, op. cit., p. 120.
- 30) 後にアウグスティヌスが語っている他の伝統によれば、孔雀の肉は腐ることがないという (*De Civitate Dei* 21: 4)。
- 31) F. Tristan, op. cit., p. 120.
- 32) 『出エジプト記』(12 : 2-14)。
- 33) 「見よ、小羊がシオンの山に立っており」(黙 14 : 1)。
- 34) F. Tristan, op. cit., p. 130.
- 35) J. Daniélou, *Les symboles chrétiens primitifs*, "La palme et la couronne", pp. 9-31.
- 36) 「競技をする人は皆、すべてに節制します。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするのですが、わたしたちは、朽ちない冠を得るために節制するのです」(一コリ 9 : 25), 「大牧者がお見えになるとき、あなたがたはしばむことのない栄冠を受けることになります」(一ペト 5 : 4), 「神を愛する人々に約束された命の冠をいただく」(ヤコ 1 : 12), 「死に至るまで忠実であれ。そうすれば、あなたに命の冠を授けよう」(黙 2 : 10)。
- 37) J. Daniélou, *Les symboles chrétiens primitifs*, p. 146.
- 38) Ibid.
- 39) 「嘆き悲しんでいる者の額に印を付けよう」、「あの印のある者に近づいてはならない」(エゼ 9 : 4 ; 6)。
- 40) 「[この天使は] こう言った。「我々が、神の僕たちの額に刻印を押してしまうまでは、大地も海も木も損なってはならない。」わたしは、刻印を押された人々の数を聞いた。それは、十四万四千人で」(黙 7 : 3-4)。
- 41) 「小羊と共に十四万四千人の者たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とが記されていた」(黙 14 : 1)。
- 42) 『12 使徒の教訓』(*Didachè*) (10 : 2-3) ; dans J. Daniélou, *Les symboles primitifs*, p. 149.
- 43) 『真実の福音書』(*Évangile de vérité*) (38 : 5) ; dans J. Daniélou, *ibid.*
- 44) *Le Pasteur d'Hermas*; dans J. Daniélou, *ibid.*, p. 148.
- 45) Origen, *Selecta in Ezechielem* IX; dans Andreas Andreopoulos, *The Sign of the Cross: the Gesture, the Mystery, the History*, Massachusetts, Paraclete Press, 2010, p. 16.
- 46) Tertullian, *Adversus Marcionem*, III: 22; dans F. Tristan, op. cit., p. 66. A similar meaning in Cyprian, Jerome, Origen; dans C. Vogel, op. cit., p. 39, n. 11. According to Vogel (p. 40), the assimilation of the Greek *tau* to the cross appears for the first time in about 135, in a letter of Pseudo-Barnabas.
- 47) Clement, *Stromata*, VI: 11, P. G. IX, col. 305: "... tou Kyriakou semeiou typon"; dans H. Leclercq, «Signe de la Croix», in *Dictionnaire d'archéologie chrétienne et de liturgie (DACL)*, T 3(2), 1914, col. 3139.
- 48) Jean Daniélou, *Les symboles chrétiens primitifs*, pp. 147-148; N. Denis-Boulet, op. cit., p. 56.
- 49) J. Daniélou, *ibid.*, p. 148.
- 50) H. Leclercq, "Croix et Crucifix", col. 3048. 。
- 51) N. Maurice-Denis Boulet, op. cit., p. 56.

- 52) Nicolas Molinier, «À propos de l'histoire du signe de la croix», p. 3.
- 53) J. Daniélou, *Les symboles chrétiens primitifs*, p. 149.
- 54) Ibid., p. 152. 十字が宇宙的救済のシンボルであるというテーマは非常に古いもので、2世紀にまで遡る。とりわけユスティノス、エイレナイオス、ニュッサのグレゴリオスなどが、このテーマについて展開している。例えば、『エフェソの信徒への手紙』（「あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに越えるこの愛を知るようになる」3:18-19）に基づいて、ニュッサのグレゴリオスは印象的な展開を行う。J. Daniélou, “Le symbolisme cosmique de la croix”, p. 23 参考。
- 55) Tertullian, *De corona*, III: 4; PL, I, col. 80; dans C. Vogel, op. cit. p. 38 and A. Andreopoulos, op. cit. p. 13.
- 56) C. Vogel, op. cit., p. 39. すでに見たように、聖バシリオスも同じ立場に立っている。
- 57) Hippolytus of Rome, *The Apostolic tradition of Hippolytus*, trans. with introd. and notes by B. S. Easton, Cambridge University Press, 1962 (1934), pp. 56-57. Selon Vogel, bien avant Tertullien et Hippolyte, on a un autre témoignage sur la pratique de se signer vers 150-180 dans les *Acta Iohannis*. Selon ce texte, l'apôtre Jean, «après qu'il eut fait le signe de la croix sur tout son corps [sur différents membres du corps], se leva et dit: Sois avec moi, Seigneur, Christ Jésus; puis il se coucha dans sa tombe»; dans C. Vogel, op. cit., pp. 41-42.
- 58) Cyprian, *Epist.*, LVIII: 9; dans H. Leclercq, «Signe de la Croix», col. 3139.
- 59) Cyprian, *De lapsis*, ch. II; dans H. Leclercq, *ibid.*
- 60) Cyril of Jerusalem, *Cateches.*, XIII: 36; PG, XXXIII, col. 816; dans A. Andreopoulos, op. cit., p. 14.
- 61) Augustine, *Tract, in Joh.*, 11: 3, PL, XXXV, col. 1476, dans Henri Rondet, «La croix sur le front», *Recherches de science religieuse* 42 (1954), p. 388, n. 1.
- 62) H. Rondet, *ibid.*, pp. 388-89.
- 63) J. Daniélou, *Les symboles chrétiens primitifs*, p. 145. Mais déjà vers la fin du 3<sup>e</sup> siècle, un païen fait cette remarque à propos de chrétiens: «Je sais qu'ils étaient chrétiens, car à tout instant ils marquaient leur front du signe de la croix» (*Actes de sainte Afra* (d. 304); dans H. Leclercq, «Signe de la Croix», col. 3140.
- 64) H. Rondet, op. cit., p. 394.
- 65) Tertullian, Origen, Hippolytus of Rome, Cyprian, Cyril of Jerusalem, Augustine, Jerome, John Chrysostom, etc.
- 66) A. Andreopoulos, op. cit., p. 23.
- 67) Besides those already quoted (note 65), Athanasius of Alexandria, Ambrosius, Basil the Great, etc.
- 68) Theodoret, *Hist. Eccles.*, III: 3, PG, LXXXII, col. 1092 sq.; dans H. Leclercq, «Signe de la Croix», col. 3139.
- 69) Prudentius, *Adv. Symmachum*, II, vers 712, P. L. LX, col. 236; dans H. Leclercq, *ibid.*, col. 3140.
- 70) H. Leclercq, *ibid.*, col. 3143.
- 71) Ibid.
- 72) C. Vogel, op. cit., p. 42.
- 73) Origen, *Selecta in Ezechielem*: IX; dans A. Andreopoulos, op. cit., p. 16.
- 74) Pierre Erny, *Le Signe de la Croix — Histoire, ethnologie et symbolique d'un geste «total»* —, Paris, L'Harmattan, 2007, pp. 14-15 参照。

## Table of Illustrations

- ① Anchor-Fish-Christogram ☩ from St. Sebastian Catacomb, pre-Constantinian, St. Sebastian Museum, Rome.
- ② Two fishes and anchor on the epitaph to Antonia, St. Domitilla Catacomb, pre-Constantinian.
- ③ Cross-Anchor on a funerary slab, Priscilla Catacomb, late 2<sup>nd</sup> or early 3<sup>rd</sup> century.
- ④ Anchor-Cross-Dolphin (the Christ) and fishes (the catechumen). Roman Africa mosaic, 4<sup>th</sup> century, National Museum of Bardo, Tunis.
- ⑤ Fish with the Cross, from the Ermaut Coptic cemetery, late 4<sup>th</sup> century or early 5<sup>th</sup> century, Louvre Museum.
- ⑥ Oil lamp with Christogram α from Générac (France), 4<sup>th</sup> century, Archaeological Museum, Nîmes.
- ⑦ Coin of the Emperor Constantine the Great with the Christogram ☩ crowning the Labarum, A. D. 327, British Museum.
- ⑧ Coin of the Emperor Decentius with the Christogram ☩ P and A & ω, A. D. 351, British Museum.
- ⑨ Two Victories with Christogram ☩ surrounded by the wreath of Christ's Victory over Death and Glory. Seriguzel marble Sarcophagus, 4<sup>th</sup> century, Istanbul Archaeological Museum.
- ⑩ Greek Crosses in circles and bunches of grapes. Stone Sarcophagus in Seraya, Qanawat (Syria), late 4<sup>th</sup> century.
- ⑪ Christogram ☩ surrounded by the wreath of Victory over Death and Glory above the Cross and two soldiers guarding the sepulcher; the composition symbolizes the Resurrection and is called "Anastasis" (from gr. *anastasis*, "resurrection"). "Anastasis Sarcophagus" from St. Domitilla Catacomb, c. A. D. 350, Vatican Museum.
- ⑫ Christogram ☩ surrounded by the wreath of Victory over Death with A & ω, Vatican Museum, undated (4<sup>th</sup> century?). In the two corners above it, the baskets of grapes at the same time signify the saved and introduce the Eucharist theme.
- ⑬ Christogram ☩ with A & ω and two soldiers guarding the sepulcher. Fragment of an "Anastasis Sarcophagus", Vatican Museum, undated (4<sup>th</sup> century?).
- ⑭ Christogram ☩ with A & ω surmounted by God's Hand with the wreath of Victory over Death and Glory. A first circle of the starring sky and a second one containing flowers, fruits and birds give it a cosmic dimension. Mosaic, San Giovanni in Fonte Baptistery, Naples, 4<sup>th</sup> century.
- ⑮ Orant and Christogram ☩ on a sarcophagus from St. Sebastian Catacomb, late 4<sup>th</sup> century, St. Sebastian Museum, Rome.
- ⑯ Cross identified with the Tree of Life of the Paradise, source of everlasting life, from which are flowing four sources (Gn 2, 10-15), topped by the dove of the Holy Spirit. San Giovanni Basilica in Laterano, Rome, 4<sup>th</sup> and 6<sup>th</sup> centuries.
- ⑰ Silver and gilt Roman plaque with the Christogram ☩ in circle and A & ω, 4<sup>th</sup> century, British Museum.
- ⑱ Roman rings with Christogram, ☩, 4<sup>th</sup> or 5<sup>th</sup> century, British Museum.
- ⑲ Base of a Roman gold-glass vessel representing a family group with Christogram ☩, 4<sup>th</sup> or 5<sup>th</sup> century, British Museum.
- ⑳ A gilded cosmic Cross of Victory over Death and. Mosaic, Sanctuary of Galla Placidia, Ravenna, c. 430-450.
- ㉑ Coptic stele with the big Cross in the form of the ankh, the ancient Egyptian symbol of life, with three other small Greek crosses, 5<sup>th</sup> century. Museum of Coptic Art, Cairo.
- ㉒ Christogram ☩ in circle with A & ω flanked by two doves holding an olive branch symbolizing the hope in an everlasting peace in Christ or already the saved. Detail from a funerary monument, 5<sup>th</sup> century, Aquitaine Museum, Bordeaux.
- ㉓ Triple Christogram ☩ in circle with A & ω, the last circle being surrounded by twelve doves. Baptistery mosaic, Albenga (Liguria), late 5<sup>th</sup> or early 6<sup>th</sup> century. Given their hierarchy, the three circles signify the three worlds constitutive of the whole manifested World rather than the Trinity.
- ㉔ Christogram ☩ in circle with angels and saints and another two ones on the left and right side with A & ω. Vault

mosaic, Capella Arcivescovile Ravenna Cathedral, A. D. 494–519.

- ②⑤ Lamp with Christogram ✠ in circle, 5<sup>th</sup> or 6<sup>th</sup> century, British Museum.
- ②⑥ Christogram ✠ in circle, flanked on the left and right side by six doves. Marble altar table, Vaugines (France), late 5<sup>th</sup> or early 6<sup>th</sup> century.
- ②⑦ Cross in circle between two Christograms ✠ at the ruins of the Church of Bosva (Jordan) dedicated in A. D. 512.
- ②⑧ Cross in circle with above and below it bunches of grapes, St. George Church in Ezra-Hauran (Syria), consecrated in A. D. 515.
- ②⑨ Christogram ✠ ( ✠ ? ) on a silver paten from the Sion Treasure, c. A. D. 570, Dumbarton Oaks, Washington D. C.
- ③⑦ Christogram ϣ above a cup flanked by two peacocks (symbol of immortality), in a décor of bunches of grapes. Marble plaque, San Apollinare Nuovo Basilica, Ravenna, 6<sup>th</sup> century.
- ③① Two stags symbolizing the catechumen aspiring to the baptism (Ps 42: 1) facing a cup surmounted by a Latin Cross flanked by two other smaller Greek Crosses. Mosaic, Sbeitla Museum (Tunisia), late 6<sup>th</sup> or early 7<sup>th</sup> century.
- ③② Christogram ✠ in circle with A & ω . St. Drausinus marble Sarcophagus from the Old Notre Dame Church of Soisson, late 6<sup>th</sup> or early 7<sup>th</sup> century, Louvre Museum.
- ③③ Double Christogram ( ϣ and ✠ ) in circle with a “S”, symbol of the bronze serpent lifted up on the Moses’ pole with which was identified the Crucified Christ (Numbers 21: 49; John 3: 14–15) on the lower part of the vertical trait of the Cross; the A and ω appear clearly in the form of the anchor. Notre Dame Church, Sassis (France), 12<sup>th</sup> century.
- ③④ Almost the same with ③③, Ozon Abbay (France), 13<sup>th</sup> century.
- ③⑤ *Agnus Dei* with the Cross in a Halo of Glory, Byzantine mosaic, Euphrasian Basilica Porec (Croatia), 6<sup>th</sup> century.
- ③⑥ *Agnus Dei* with a Latin Cross on the Golgotha with a defeated dragon below representing the death; “Commentary on the Apocalypse” by Beatus de Liebana (730–c. 800).
- ③⑦ *Agnus Dei* at the center of a Cross surrounded in the corners by the emblems of the Four Evangelists. Romanesque Ivory, Germany or North Italy, 1000–1050.
- ③⑧ Roman ivory casket plaque with Crucifixion, A. D. 420–450, one of the earliest known portrayals of the Crucifixion; the Christ gazes at the viewer, triumphant in death. The other one is a bas-relief on a wooden gate at Santa Sabina Basilica in Rome.
- ③⑨ Crucifixion and saints, front of the Byzantine Fieschi-Morgan Reliquary. Cloisonée enamel, early 9<sup>th</sup> century, Metropolitan Museum of Art, New-York. The presence of the sun and the moon gives to the Christ’s Victory over Death a cosmic dimension.
- ④⑦ Gilded bronze Crucifix from Aby Church (Jutland, Denmark), mid. 11<sup>th</sup> century, National Museum Copenhagen. A majestic Christ who defeated the death through his death.
- ④① Ivory Crucifix with enameled eyes from Carrizo Abbey (Spain), late 11<sup>th</sup> century, Museo Provincial León. Triumphant representation of crucified and not of dead Christ.
- ④② Matthias Grünewald (c. 1470–1528), “The Crucifixion 3” (1523–1524), Kunsthalle, Karlsruhe.
- ④③ Jean Bellegambe (c. 1470–1536), “Mystical Bath” (1526), Beaux-Arts Museum, Lille.



## Early Christian Cross Images 1



① Anchor-Fish-XP  
Roman Catacomb



② Anchor-fishes  
Roman Catacomb



③ Cross-Anchor-fishes  
Roman Catacomb



④ Anchor-Cross-Dolphin-fishes,  
mosaic (Roman Africa), 4<sup>th</sup> century



⑤ Fish with the Cross, bas relief  
(Coptic cemetery), 4<sup>th</sup>-5<sup>th</sup> century



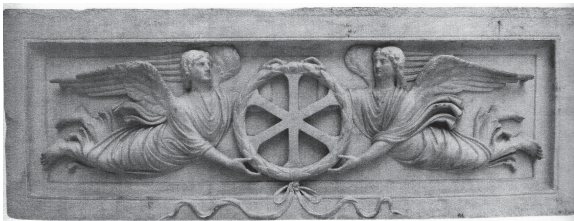
⑥ Lamp with XP  
4<sup>th</sup> century



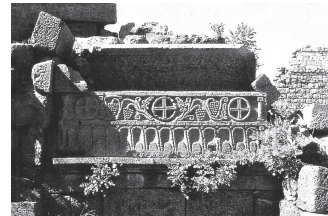
⑦ Coin of the Emperor Constantine with the  
Christogram XP above the Labarum, A.D. 327



⑧ Coin of Emperor Decentius with the  
Christogram XP and A & ω, A.D. 351



⑨ Two Victories with the Christogram (IX) and the wreath of Christ's  
Victory over Death, marble Sarcophagus, 4<sup>th</sup> century



⑩ Crosses in circle and bunches of grapes  
(Syria), late 4<sup>th</sup> century

## Early Christian Cross Images 2



11 "Anastasis Sarcophagus",  
c. A.D. 350



12 Christogram (XP) with A &  $\omega$ , wreath of Victory  
and baskets of grapes; undated (4th century ?)



13 "Anastasis Sarcophagus",  
undated (4th century ?)



14 Christogram (TP) with A &  $\omega$  and wreath  
of Victory, mosaic (Naples), 4th century



15 Orant next to Christogram (XP)  
(Rome Catacomb), late 4th century



16 Cross-Tree of Life of the Paradise  
(Rome), 4th and 6th centuries



17 Roman plaque with Christogram (XP)  
in circle and A &  $\omega$ , 4th century



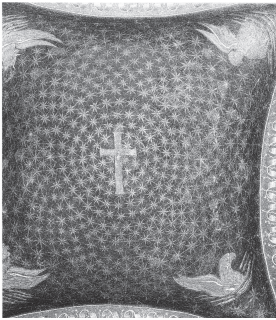
18 Roman rings with Christogram  
(TP), 4th or 5th century



19 Roman glass with Christogram  
(XP), 4th or 5th century



## Early Christian Cross Images 3



㉑ Cross of Victory over Death, mosaic (Ravenna), c. 430-450



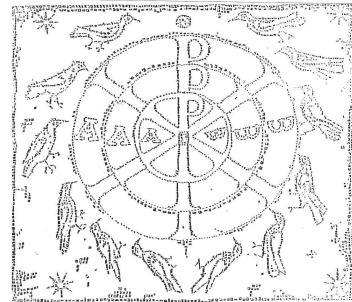
㉒ Coptic stele with Cross in the form of the ankh, 5th century



㉓ Christogram (XP) in circle with A & ω and doves with olive branch (France), 5th century



㉔ Triple Christogram (XP) in circle with A & ω and twelve doves, mosaic (Albenga, Liguria), late 5th or early 6th century



㉕ Christogram (IX) in circle with angels and saints, vault mosaic (Ravenna Cathedral), A.D. 494-519



㉖ Lamp with Christogram (XP) in circle, 5th or 6th century

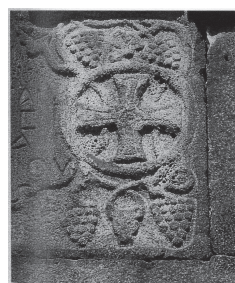


㉗ Christogram (XP) in circle with twelve doves, marble altar table (France), late 5th or early 6th century

# Early Christian Cross Images 4



27 Cross in circle between two Christograms (IX), Jordan, A.D.512



28 Cross in circle with bunches of grapes, Syria, A.D. 515



29 Christogram (XP) on a paten, c. A.D. 570



30 Christogram (TP), two peacocks and bunches of grapes, Ravenna, 6<sup>th</sup> century



31 Two stags (the catechumens) facing a cup surmounted by a Latin Cross. Mosaic, Tunisia, late 6<sup>th</sup> or early 7<sup>th</sup> century



32 Christogram (XP) with A & ω. Sarcophagus, Soisson, late 6<sup>th</sup> or early 7<sup>th</sup> century



33 (left) 34 (right) Double Christogram (TP and XP) in circle with A & ω and "S".  
France, 12<sup>th</sup> and 13<sup>th</sup> century



## Early Christian Cross Images 5



㉔ (above) *Agnus Dei* with the Cross, Byzantine mosaic, Croatia, 6<sup>th</sup> century



㉕ (right) *Agnus Dei* with the Cross on the Golgotha. Beatus de Liebana (730 – c. 800), “Commentary on the Apocalypse”



㉖ *Agnus Dei* at the center of a Cross. Ivory, Germany or North Italy, 1000-1050



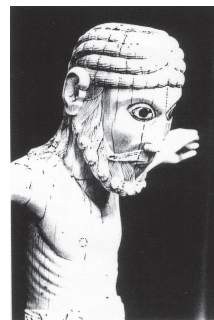
㉗ Roman ivory with Crucifixion, A.D. 420-450. The earliest known portrayal of the Crucifixion



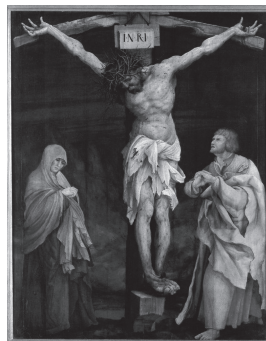
㉘ Crucifixion and saints, Byzantine Reliquary, early 9<sup>th</sup> century



㉙ Gilded bronze Crucifix, Denmark, mid. 11<sup>th</sup> century



㉚ Ivory Crucifix with enameled eyes, Spain, late 11<sup>th</sup> century



㉛ Matthias Grünewald (c.1470-1528), “The Crucifixion 3”



㉜ Jean Bellegambe (c.1470-1536), “Mystical Bath”